

史料館報

第 68 号
平成10年 3 月

史料館と大学教育

——史料管理学研修会と大学院構想——

大 口 勇次郎

一、はじめに

大学教員として史料館に対する注文や期待を述べよというのが、この欄で私に与えられた課題である。この機会に、史料館についてふだん思っていることを書かせていただくことにした。

私と史料館とのつながりは、学生のころに何度か通って史料のお世話になったことにはじまり、その後も所蔵史料を閲覧して論文に使わせていただいている。大学に勤務してからは、学生たちが論文作成のために利用したり、また史料管理学の研修会に参加して単位を頂戴するなどいろいろな点でお世話になっている。最近では、運営協議会の一員として

多少は館の運営にも係わっているが、ここではそのような立場を離れ、大学教育に携わっている史料館の利用者として発言させていただくことにしたい。

さて、史料館の職務は多岐にわたっており、スタッフは通常の研究活動の上に、館固有の仕事を担っている。これらは、

a. (史料の収集・保存・公開)
古文書史料・記録の収集に始まって、整理、修復、保存、目録、閲覧にいたるまでの一連の作業。さらに一部所蔵史料の翻刻、刊行。

b. (全国の史料目録作成) 全国の近世・近代史料の所在調査および刊行された全国の史料目録など史料所在情報の収集と公開。

c. (研修会) 史料管理学の研

| 目 次 | |
|--|-----|
| 史料館と大学教育 大口勇次郎……… | (1) |
| 受贈圖書……… | (3) |
| 特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」……… | (4) |
| 一九九七年度研究会について……… | (4) |
| ビザンチン写本 その装飾と技法……… | (6) |
| 吉岡栄美子……… | (6) |
| 究と研修会の開催。 の三つくらいに大きく区分すること が出来ようか。 | |

二、史料目録の作成

私の学生時代を振り返ってみると、史料館の最初の仕事であった『近世庶民史料所在目録』によって文書の所在に見当をつけて、史料調査に出掛けたり、古文書史料の閲覧に戸越に通ったことを思い出す。この点では、上のaの史料の収集・公開の仕事は、この数十年の間に、史料の現物からマイクロフィルムの収集に代わったり、修復・保存の技術が格段に向上したりしながらも、いずれも歴史研究の基本として変わらず重要な役割を占めていると言える。

bの史料の所在情報について言えば、史料館所蔵史料については『史料館収蔵史料総覧』(名著出版、一九九六)が刊行され、これまでの数

| | |
|---------------------|------|
| 欧州日本史料専門家会議に参加して……… | (6) |
| 史料所在調査報告……… | (7) |
| 基盤研究(A)研究会報告……… | (8) |
| 長期在外研修報告記……… | (9) |
| 平成九年度新収史料紹介……… | (10) |
| 史料管理学研修会修了者一覧……… | (11) |
| 兼報……… | (12) |

十家について史料一点ごとに作成された詳細な文書目録と合わせて、館蔵史料の全貌を窺うことが出来るようになった。全国の史料情報については『近世・近代史料目録総覧』(三省堂、一九九二)が刊行された

が、これはかつて一九四八年から行われた全国的な史料所在調査を継承し、より発展させた貴重な仕事である。この四十年間に、全国の自治体史刊行の盛況もあつて、膨大な史料の発掘とそれに伴う数多い史料目録の刊行を土台としたものであり、本来は全国学会なり国会図書館なりが手を付けるべき仕事であつたかもしれないが、史料館が率先してこの緑の下力持ちに当たる地味な作業を完成させたのである。

このような史料所在データは、おそらく今後はCD-ROMに蓄積されるであろうから、「目録総覧」は活字情報としては最後の仕事かもしれない。一般の研究者はもちろん、

とくにこれから研究の道に入ろうとする学生たちにとっては実に貴重な情報であり、研究の手引きとなるであらう。

三、史料管理学会

次に、c. の史料管理学の研修会について述べてみたい。

史料管理学研修会もまた、初めは近世史料取扱い講習会と称した小規模なものであったが、四〇年近い歴史を刻んで今日のように多くの講師を招き、全国から受講生を集め、長期間にわたる研修会に成長した。そして、一九九四年からは、国公私立大学の単位互換制度を適用して、前もって互換の承認を得れば、受講生に正式の単位を認定できることになったのは喜ばしいことである。ただ現状では、国文学研究資料館が「大学」でないところから、国立大学では通常の単位互換制度の単位認定になじまない面がないわけではないが、これは当該大学の裁量の範囲でクリアーできるものである。

大学の卒業生、あるいは修士課程を修了したものからも、図書館、博物館に就職したり、あるいは自治体史の編集室に勤めて、近世・近代の

古文書史料の調査や管理の仕事を直接担当する者も多い。また卒業論文のために史料調査に行く際にも、古文書史料の取扱いについて最低限のルールを備えておきたいものである。

近世の地方史料は、第二次大戦後に大学単位の調査から始まったこともあって、目録の取り方一つとっても独特な手法がタコソボ的に伝授されてきた面がある。これに対して研修会は、史料整理の方法の公開、保存技術の教育普及、あるいは史料管理の理論の構築などさまざまな点で大きな役割を果たしてきたことはよく知られている。史料館のような龐大な史料の保存・管理に日常的に携わっている機関にして初めて出来る研修カリキュラムである。私どものような小規模大学の史学科では、ふだん古文書に接する機会がなく、授業でも史料学に十分時間を割く事ができないので、このような充実した内容をもった研修会による単位取得を大学院生に勧めてきたし、多くの学生たちがその機会を得てきた。

四、大学改革

さて、ここ数年来全国の国立大学で、大学改革の波が押し寄せてさま

ざまな改革の試みがなされていることは周知のとおりである。ここで私どもの勤務校のささやかな経験を述べると、数年前のことになるが、改革の一つの方向として歴史系の授業内容を充実するために、新しく独立の講座として「歴史情報学（仮称）」

講座の増設を考えたことがあった。都内の大学では、ほとんど学生定員や教員の新規要求が不可能という状況にあったので、新設の講座には歴史史料保存機関のスタッフを客員教授に迎えて、あとは出来るかぎり非常勤講師によって、史料の保存・管理学、歴史情報の整理学などのカリキュラムを埋めるというものであった。このときには史料館の研修会の単位も当然必修科目に予定していた。しかし実際に検討してみると、結局小規模大学の悲しさで、新規の講座を作ると、既設の講座の授業カリキュラムが手薄にならざるをえないこともあって、机上のプランのままで終わってしまった。その後、我々の大学の史学科は、日本史、西洋史、東洋史の連携によって「比較歴史学」という名称の下に実験系の予算のついた大講座制に組み換えることができた。史料学に関するカリキュラムとしては、大学院における史料管理

学研修会の単位互換と、学部の授業科目として「歴史情報学」を開き史料保存機関で業務に携わっている方に講師をお願いして現在にいたっている。

その折りに、各方面の方々と大学の改革の理念と方法について議論を重ねてきたが、そのときの経験をもとに、文部省管轄下の国立機関の制度的な改革の可能性について考えてみたい。

五、史料館の大学院構想について

将来、史料館も総合研究大学院に加わり、研究者養成に当たることになると思うが、そのときに単に少数の定員の学生を囲い込むようにして指導するだけであれば、積極的なメリットに乏しいのではあるまいか。私はむしろ現在の研修会における教育経験を実績として「史料管理学」（仮称）の専攻課程に編成替えして欲しいと思う。この専攻であれば、史料館の独自性を強くアピールできるものであり（歴史民俗博物館にないもの）、日本で唯一のものとして新しく専攻設置を主張する価値があると認められると思われる。教育部門を強化するとすれば、史

料保存の片手間にするには荷が重すぎるので、史料館の組織も、主として史料収集・保存・閲覧に当たる従来の部門と、主として史料管理学教育に当たる部門の二つの実験科目の大講座に組み換えて、両方の仕事を並行して進めることができるようスタッフの拡充がなされる必要があらう。その上で両部門は仕事の交流を続け、それによって史料館の機能もより充実すると思われる。

この場合、どのような学生を受け入れるのが問題とならう。教育内容が史料管理学であるならば、現在の総合研究大学院が受け入れている博士課程の学生ではなく、これまでの研修会で受け入れていたように修士課程の大学院生こそが望ましいことになる。また館独自に数人の大学院学生の入学を認めるのか、これまでのように国公立大学の院生を預かる形式で大学院教育を行うのかも十分検討すべきであらうと思われる。史料保存機関から派遣される受講生に対しても、これまでと同様に開かれていくてはならない。

もし独自の学生を受け入れるとしても、教科カリキュラムのすべてを館で賄うことは困難であるかもしれない。この点は、すでに単位互換制

が成立している大学のカリキュラムを逆に利用することによって、例えば、古文書学、史料演習、博物館学、美術史、書誌学、文化情報学など、文学部系の大学院なら通常開講している科目を利用することができるとある。これによって初めて本来の単位互換が成立し、史料管理学専攻の授業科目もバラエティのあるものになるはずである。また大学同士の単位互換も、法的には整備されているにもかかわらず、さまざまなネットワークによって現状ではなかなか拡大しにくいものがあるので、もし史料館の大学院が将来その仲介役を果たすことができれば、史料学関係の科目に関して広く単位互換が成立することも夢ではないであらう。

六、おわりに

もちろんこのような計画は、現実の総合研究大学院や国文学研究資料館の組織のなかで考えれば、さまざまな困難があることは承知している。しかし現在、史料管理学研修会が現実には果たしている役割を認識するならば、このような構想も不可能ではないと思うのである。文部省もまた、いまは真に社会的必要性があり、独

自性が認められれば新しい試みを積極的にサポートする姿勢を持つていくように思われる。史料館は、早急にかつ主体的に大学院問題を考えるべきときにあるように思われる。

与えられたテーマを越えて、やや先走ったことを述べたかもしれないが、いずれ史料館としても、研修会の問題、大学院の問題は直面しなければならぬ問題と考える。史料館

問題がこれまで全国の研究者の問題であり、学会の問題であつたように、史料保存機関の人材養成は、全大学の問題でもあると思うので敢えて所感を述べてみたのである。九八年年頭の初夢として聞いていただければ幸いである。

(お茶の水女子大学・教授
当館運営協議員)

受贈図書 平成八年度 (五)

〔一〕内は寄贈者名(敬称略)ただし、省略されている場合があります。

平成六年度葛飾区民俗資料調査報告書

〔東京都葛飾区郷土と天文の博物館〕

横浜市史 II 第一巻(下)〔横浜市〕

近世村落の動向と山中騒動の研究〔田中

薫

高山II―伝統的建造物群保存対策調査報告

告I〔高山市教育委員会〕

葦山町史 第十一巻通史II近世〔静岡県

県〕葦山町

沼津市史叢書 四〔沼津市教育委員会〕

沼津市史編さん調査報告書 第九集〔沼

津市教育委員会〕

豊明市史 資料編五(民俗編)、本文編〔豊

明市役所〕

写真でみる豊明の歴史〔豊明市役所〕

幸田町史 資料編3〔現代〕〔愛知県

幸田町〕

西尾藩主御門替えと組下足輕〔きらら書

房〕

近世の村と寺―紀伊国伊都郡境原村を事

例として―〔国立歴史民俗博物館〕

京都大学文学部博物館図録 第7冊〔京

都大学文学部博物館〕

洋学資料による日本文化史の研究 IX

〔吉備洋学資料研究会〕

金城学院百年史〔金城学院〕

日本の土地―その歴史と現状―〔ぎょう

せい〕

江戸幕府財政史論〔吉川弘文館〕

近世領主権力と農民〔吉川弘文館〕

高野山大学創立百十周年記念論文集〔高

野山大学〕

(10ページへ続く)

特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の

体系化に関する研究」一九九七年度研究会について

特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」は、史料館の共同研究活動の中核をなすものとして昨年度開始された。「記録史料認識論」「評価と収集」「整理と情報化」「保存と修復」「文書館と専門職」の五つの研究部会を設け、当面、研究期間は五年間。その最終年度には、研究成果をまとめて「史料学・史料管理学講座」ないしは「記録史料学講座」というような研究シリーズを刊行しようという計画であった（『史料館報』第六十六号、一九九七年三月、参照）。もともと予算が十分でなく、計画通りの成果があがるか心配だったが、さいわい、館外から参加して下さっている皆さんの熱心な協力のおかげで好スタートを切り、昨年度末には「研究レポートNo.1」も刊行できた。ところが、二年目に入り、さあこれからという時に、平成九年度より文部省予算の中から特定研究という項目自体が削除されたことを知らされた。特定研究という形での研究計画は続けられないということである。まこ

とに突然のことで館員一同驚いているが、とりわけ館外の研究協力者の方々には、さまざまなご無理を言って参加していただいているだけに、極めて申し訳ない事態となってしまうた。

ただ平成九年度については、「研究レポートNo.1」刊行などの成果が認められたものか、特別の予算措置を受けて3回の研究会を実施することができた。以下に報告するのは、その概要である。当館としては、来年度以降についても何らかの形で共同研究を継続したいと考え、方法を模索している。しかし現在のところ、どうなるかはまったく不明である。

〔平成九年度研究参加メンバー〕

第1部会（「記録史料認識論」研究部会）

大藤 修（部会長、東北大学文学部教授）、石上英一（東京大学史料編纂所教授）、富善一敏（東京大学大学院人文社会科学系研究科研究員）、保坂裕興（駿河台大学文化情報学部講師）、保立道久（東京

大学史料編纂所教授）、廣瀬順皓

（駿河台大学文化情報学部教授）、

吉田伸之（東京大学大学院人文社会系研究科教授）、吉田 裕（一

橋大学社会学部教授）、中野 等

（九州大学大学院比較社会文化研究科助教授）、高木俊輔（史料館教授）、大友一雄（史料館助教授）

第2部会（「評価と収集」研究部会）

田中康雄（部会長、群馬県立文書館長）、岩本雅子（記録管理学会理事）、小風秀雅（お茶の水女子大学文教育学部教授）、戸島 昭

（山口県教育委員会文化財保護課課長補佐）、松尾正人（中央大学文学部教授）、水口政次（東京都公文書館主事）、鈴江英一（史料館教授）、渡辺浩一（史料館助手）

第3部会（「整理と情報化」研究部会）

青山英幸（部会長、北海道立文書館文書専門員）、田良島哲（文化庁文化財保護部美術工芸課文化財調査官）、永田治樹（図書館情報

大学図書館情報学部助教授）、水野 保（東京都公文書館主事）、山崎一郎（山口県文書館研究員）、横山伊徳（東京大学史料編纂所助教授）、蔵持重裕（滋賀大学経済学部助教授兼史料館客員助教授）、永村 真（日本女子大学文学部教

授兼史料館客員教授）、山田哲好

（史料館助教授）、安藤正人（史料館助教授）、森本祥子（史料館

非常勤研究員）

第4部会（「保存と修復」研究部会）

稲葉政満（部会長、東京芸術大学美術学部助教授）、小川雄二郎（国連地域開発センター、防災計画主幹）、木部 徹（キャット代表取

締役）、高橋 実（作新学院大学経営学部教授）、二宮修治（東京

学芸大学教育学部助教授）、増田勝彦（東京国立文化財研究所修復技術部長）、村田忠繁（元興寺文

化財研究所保存科学センター室長）、木川りか（東京国立文化財研究所主任研究員）、青木 睦（史料館助手）、福田千鶴（史料館助手）

第5部会（「文書館と専門職」研究部会）

石原一則（部会長、神奈川県立公文書館主査）、アンソニー・ジェンキンス（琉球大学法文学部教授）、井村哲郎（アジア経済研究所地域研究部主任調査研究員）、君塚仁

彦（東京学芸大学教育学部助教授）、倉沢愛子（慶応大学経済学部教授）、吉見義明（中央大学商学部教授）、

渡辺佳子（京都府立総合資料館歴史資料課資料主任）、富永一也（沖

縄県公文書館公文書主任専門員）、
丑木幸男（史料館教授）、森安
彦（史料館長）

〔平成9年度第1回研究会〕一九九
七年一〇月一四日～一〇月一五日

第1部会（記録史料認識論）

石上英一「日本古代史料学につ
いて」、保坂裕興「記録史料とモノ
史料の接点について」

第2部会（評価と収集）

A・P・ジェンキンス「沖縄戦に
おけるアメリカ軍人の聞き取りに
ついて」、鈴江英一「北海道史に
おける聞き取りについて」、田中
康雄「県文書と文書館での評価選
別と利用―群馬県を中心に―」

第3部会（整理と情報化）

安藤正人「Encoded Archival

Description―記録史料記述の電子

化・PROの試み―」、山田哲好「近

世史料の整理と目録記述・編成―

その歴史・現状・課題―」

第4部会（保存と修復）

木川りか「臭化メチルの規則の動
向と今後の代替策について」、青
木睦「文書館における殺虫・殺
菌の実態と問題点―現時点での燻
蒸剤使用アンケートをもとに―」、
村田忠繁「各種電磁波による海外

の処置法と脱酸素法による殺虫技
術」

第5部会（文書館と専門職）

石原一則「神奈川県立公文書館に
おける専門職員」、渡辺佳子「文
書館専門職について―現状と課題
―」、富永一也「沖縄県公文書館
における専門職員」、君塚仁彦「国
際博物館会議における博物館専門
職員職業倫理規定（ICOM Code
Professional Ethics）について」、
A・P・ジェンキンス「社会の関
心を高める手段として―A専門職
としてのアーキビスト、B役割と
重要性、英国のケース―」、井村
哲郎「利用者からみた専門職員の
課題」

〔第2回研究会〕一九九七年一二月
一日～一二月二日

第1部会（記録史料認識論）

吉田 裕「公文書の焼却と隠匿」、
中野 等「柳川藩立花家『資料』
の形成と構造」

第2部会（評価と収集）

石原一則「欧米の記録評価選別論
とわが国における実際」、鈴江英
一「文書選別の試行について―北
海道立文書館準備過程における」

第3部会（整理と情報化）

水野 保「近代行政文書目録の現
状と課題」、青山英幸「目録記述
の標準化に向けて―記録史料の編
成―レベルの設定について―」

第4部会（保存と修復）

青木 睦「近世における保存容器
について」、二宮修治「環境汚染
が及ぼす保存環境への影響につい
て」

第5部会（文書館と専門職）

渡辺佳子「文書館専門職員の職務
について―実務の現場から―」、
富永一也「文書館専門職員の職務
について―プロフェッションとし
て確立するためには―」

〔第3回研究会〕一九九八年一月二
九日～一月三〇日

第1部会（記録史料認識論）

広瀬順皓「植民地総督府史料につ
いて」、福田千鶴「大名文書の成
立と構造」

第2部会（評価と収集）

渡辺佳子「記録史料の評価・選別
論をめぐって」、水口政次「記録
史料の評価・選別論をめぐって―
シェレンバーグについて―」

第3部会（整理と情報化）

永田治樹「目録情報（メタデータ）
の新しい原則とその処理環境」、

山田哲好「近世文書目録論の批判
的検討―中野美智子氏の目録論を
中心に―」、保坂裕興「記録史料
学的文書目録編成・記述論の批判
的検討―歴史学の立場から―」

第4部会（保存と修復）

小川雄二郎「防災計画指針・危機
管理論」、田良島哲「災害救助論」

第5部会（文書館と専門職）

石原一則「文書館専門職の職務に
ついて」、丑木幸男「文書館専門
職の専門性について」

以上が平成9年度の研究会の一覧
である。各研究報告の概要につい
ては、昨年度に引き続き「研究レポ
ートNo2」を刊行するので、ご批判を
お寄せいただければ幸いである。

（安藤正人）

◎閲覧業務停止のお知らせ

蔵書点検及び書庫燻蒸の実施に
ともない、左記の期間の閲覧業務
を停止します。

四月二二日(水)～五月一日(金)
閲覧業務再開 五月六日(水)～

「ビザンチン写本」その装飾と技法

「写本研究と資料保存」講演会」について

吉岡 栄美子

平成九年一月一九日、「ビザンチン写本」その装飾と技法「写本研究と資料保存」講演会」が当館で開催された。この会は、ブルガリア文化フェスティバル「バルカン古典文学展」の開催を機に来日された「イヴァン・ドイチェフ」スラブ・ビザンチン研究センター所長アキシニア・ジュロヴァ教授の講演を中心にした講演会であった。当館で開催されたのは、数量・美術的価値もさることながら、九世紀の写本が原型で保存されているセンター所蔵写本を通じて、書誌に対する造詣を深めるとともに、写本に施した保存処置の学術的研究の成果を知ること、より一層ブルガリアとの国際交流を深めることにあった。

日本とセンターとの交流は一九九三年に、センター所蔵写本類の保存作業を進めるための協力要請に始まる。これを受けて日本から書籍・紙資料の修復家が国際交流基金で派遣され、保存環境の整備を行う一方で、写本のほとんどを保存容器に収納し、劣化損傷を予防する手当ても現在で

は終了した。このような修復よりも写本のオリジナリティを尊重した保存作業と並行してビザンチン様式製本の書誌的・歴史的観点からの共同研究も開始され、今後より適切な保存方針と作業計画の立案に役立てることが可能になった。

当日のプログラムは、①「早稲田大学図書館所蔵ニコラス・ラブ・イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡」：西洋古版本の書誌学的研究報告②「ビザンチン写本、スラブ写本の技術」：二〇〇枚におよぶスライドを中心にしたセンター所蔵の克明的写本形態の解説③「イヴァン・ドイチェフ」スラブ・ビザンチン研究センター所蔵ビザンチン写本の保存作業について」：ビザンチン製本技術の紹介とセンターにおける保存作業の状況と課題④「国文学研究資料館における和古書整理の概要」：整理閲覧部における和古書整理ベータベース化と管理・保存の実際であった。なお、講演会に先立ち開催中の「新収／明治の本」のギャラリートークが整理閲覧部の協力で行われた。

欧州日本資料専門家会議

に参加して

渡辺浩一

一九九七年九月二四日から二七日までドイツのハイデルベルグにおいて第八回欧州日本資料専門家会議(European Association of Japanese Resource Specialists、EJRS)が開催された。丑木幸男教授と私が国際科研「在欧日本史料の調査」の情報収集のため参加したので以下会議の概要を紹介したい。

この会議は、日本学研究者と日本資料を取り扱う図書館司書の交流を目的としているように見受けられる。したがって、昨年八月フタベストで行われた欧州日本学会議や欧州各国ごとに開かれる日本学会議とはやや性格を異にする。そのためか報告も資料紹介がほとんどで、本格的な分析が報告されたりそれをめぐって突っ込んだ討論が行われているという様子ではなかった。休憩時間も三〇分、昼食は七五分とゆったりしたプログラムで各地からの参加者と十分に交流することができるとは好ましく思えた。

参加者は約四〇名、その所属機関の国別内訳は日本一一、ドイツ一〇、

イギリス六、オランダ・ロシア・フランス・オーストリアが各三であった。イタリアからの参加者が皆無なのは同時期にイタリアで日本学会議が開かれていたからであり、フランスからの参加者がいずれも日本人司書であることも考えると、欧州の日本学の人脉がゲルマン語圏とラテン語圏で濃淡があるようにも思われた。

報告は二四日の午後と二六日朝の四本が日本資料に関する自由論題報告、二五日は欧州人の日本紀行についての Special Workshop で六つの報告が行われた。二六日には昼前から日本資料関係の情報についての報告が四本あった。日本語で報告を行ったのは私を含めて二人だけで、残りは全て英語であった。そのため特に情報関係の報告は皆目理解できなかった。

最終日は巡見で、ハイデルベルグの南東約六〇キロに位置するビーテハイム Beitheim のホールモンドハウス(町の歴史博物館)で行われている川鍋暁斎の特別展を見学した。近世都市史を専攻する筆者にとつては、その都市の歴史の常設展と博物館の建物(上層都市民の町屋)および都市景観を観察できたことは収穫であった。

史料所在 調査報告

飛騨国
大野郡

高山町会所・戸長役場文書

—その五—

高山市郷土館蔵

一九九七(平成七)年二月一日から一九日までの四日間、岐阜県高山市上一之町七五番地高山市郷土館において、高山町会所・戸長役場文書(仮称)の第五回調査を実施した。参加者は、郷土館からの谷畠博之氏・政井陽子氏、当館からの森安彦・高木俊輔・丑木幸男・大友一雄・青木睦・福田千鶴・渡辺浩一に加え、富善一敏氏(日本学術振興会特別研究員)・山崎圭氏(同前)・金行信輔氏(同)・小林信也氏(同)の計一三名であった(一九九七年一月にも基盤研究(A)1により調査を実施しており参加人員・調査成果は二度の調査を含む)。

今年度調査分の概要を紹介すると以下の通りである。

箱一六一―一九は、天保一三年から安政三年までの町年寄詰所の日記である。

箱一一三には、高山に來た役人の賄い関係の史料や、明治維新に伴う鎮撫使の飛騨入国に関する史料がある。後者では鎮撫使の行列を記した

ものや郡中惣代の願書写が興味深い。そのほか、郡中割その他の諸負担の上納受取書が多数入った袋が三袋あった。

箱一一五には、窮民調査・施粥・御手当米・御賑恤米(明治五年)に関する帳簿や受取書があるほか、下向町焼失一件(嘉永三年)史料、宮川通築造所御手伝への難民人雇用(明治元年)にかかわるもの、施薬所関係一件書類の袋五つなどが入っている。

箱一一六には、幕末から明治初年にかけての永続金・貯夫食・團穀・畜穀・窮民救済関係の帳簿・願書・証文・上納受取などがある。

箱一一七には、天保九年巡見使・明治二年巡察使の日記・御用留心得帳・入用帳・献立書などが収められている。箱一二〇では、明治八年大火・宗猷寺町焼失一件・神明町はた小屋焼失一件・西川原町出火・上向町出火一件など火事ごとに働之者書上・罹災者帳簿などが袋にまとめられている。

箱一二一には、文政一二年・天保一二年・嘉永六年の儉約令請印帳八

冊、天保改革法令の組々請証文など一二通が入った袋一つがある。

箱一二二には、郡中入用、万雑(惣町入用)、橋・町会所など普請金の取立帳、町村入目帳など約一七〇冊と、上記の上納受取書(小切紙)など八〇通入りの袋一つがある。箱一二三は、箱一二二と同様の取立帳のほか、材木書上帳・家屋敷質入証文・煮売商売取調書付・米相場関係など雑多な内容である。

箱一二五には、太政官日誌が慶応四年五月から明治二年六月まで二一冊があり、箱一二六にも引き続き、明治二年六月から明治五年二月まで二五冊の太政官日誌がある。

以上をもつて、当文書群の一点ごとのカード取りは一通り終了した。次に当文書群の階層構造をどのように考えるかが問題である。以前、当『史料館報』六〇号では、明治六年・一二年目録などを参照して、サブ・グループとして壺之町村・式之町村・三之町村・町会所・戸長役場を考え、前三グループについては明治六年目録の記載に従い、皮筆筒・桐箆筒・長持というシリーズを仮説的に提示しておいた。しかし、これには少なからざる問題があることがわかってきた。

というのは、第一に現在の数百に昇る一件文書の袋に収納されている史料のなかで明確に明治初年段階では別の保管場所に存在したことが判明するものが少なからずあること。

第二に、三人の町年寄保管分(明治六年目録)、町会所保管分(明治八年引継課目)のほかに、高山陣屋内の町年寄詰所に保管されていたと推定される史料が判明したこと。第三に、明治一二年目録記載史料約千件のなかで明治六年目録(約二六七件)にも同八年目録(三三三件)にも記載されない約七〇〇件の文書の管理主体と保管場所が確定できないこと。以上三つの理由による。

また本文書群の名称も必ずしも最適とはいえないこともわかってきた。それは、本文書群が複数の管理主体・保管場所から単一の文書群になったのは明治一〇年のことであり、その時点ですでに町会所は存在せず、高山町事務扱所に変化しているからである。

以上のように明治初年のいくつかの目録を軸とした史料管理史の研究と、史料一点ごとの丹念なカード取りによって、当初の仮説からいくつかの問題点が浮かび上がってきた。認識の前進である。(渡辺浩一)

報告

「幕藩領主と村方・町方文書群の発生

・展開・伝存に関する史料学的研究」の研究会開催

平成七年度から継続している科学研究費補助金（基盤研究A）の最終年度の研究会を、平成九年一月二日に国文学研究資料館大会議室で開催した。出席者は研究分担者および史料館員一六名。

三年継続事業の最終年度であり、報告書を作成するとともに「史料学論文集」（仮題）刊行を予定しているので、次の四本の報告があり、熱のこもった討論が行われた。

①福田千鶴氏「幕府勘定所と陣屋―「伺書」のライフサイクルをめぐって―」

②保坂裕興氏「地方町方文書雛形研究についての小報告」

③佐藤孝之氏「近世前期の広域村落支配の史料の作成・授受・管理機能―北遠幕領を事例として―」

④笠谷和比古氏「文書館学と史料学」

①は幕府勘定所と郡代（陣屋）の二つの異なる組織機構における文書群の相関関係を、高山陣屋文書（岐

討の意義を指摘した。

「諸案紙留書」に収録された五一件の案文を検討し、住民・町役人（組頭・町年寄）―高山陣屋の関係から文書が作成される局面を、文言・文書の種別・文書様式を通して検討した。さらに他の雛形集として「御用書法并相定文体等」（「仙台市史」所収）、町田家文書中の数種類の雛形を比較検討した結果、領主の指示によるものが多く、記録史料の知的技術体系が権力側の作成した枠内で普及した傾向が強いことを指摘した。村方独自で文書類型を作成した可能性の検討を今後の課題とした。

議論では事例が少なく、実例をより多く収集しての比較検討が要請された。

③は佐藤氏が北遠地方で長年にわたり進めてきた調査研究の成果を踏まえて、広域村落支配の概要をまとめた後、「領」支配と史料の作成・授受・管理を、「在地手代」期と大庄屋期の年貢収取構造と史料の作成・伝来の関連を検討した。

「在地手代」期には在地手代が村宛に年貢請取状を発行したのに対して、大庄屋期には代官が大庄屋宛に年貢割付帳を発行し、その写しを大庄屋が村宛に提示するようになった

史料作成の変化を明らかにし、年貢賦課の権限が在地手代から代官へ移行したことに照応して、年貢賦課史料が変化したことを解明した。しかし、村宛の年貢割付状は大庄屋の子孫の家に伝来したことから、在地手代と大庄屋とは同一人物が襲職しており、官僚化は進展したが、地域への影響力は維持したことを指摘した。

④は文書館学（史料管理学）と史料学を対比させて、前者の研究領域を文書史料の現前性による整理と管理を遂行する実践的性格に求め、一つの学問領域たりうることを指摘し、後者は文書の社会的機能の総体的解明、当時のコミュニケーションのあり方を復元するために、文書体系の解明を研究領域とし、様式論・体系論、存在論を中心とする文書の歴史学であり、長い古文書学の伝統のうえに構築された学問であるとし、それぞれ固有の研究領域を維持しながら展開することを期待した。両者ともに非文献資料も対象とすべきであり、現状では不十分であることを指摘した。

研究報告の後、総合科研委員会から年度末に発行する報告書の次の構成案が提示された承された。

一 研究の目的と方法。二 研究活動の記録。三 研究（第一部史料管理史。第二部史料機能論。第三部史料学からの歴史分析）。四 資料

「長期在外研修報告記」

米国における日本関係史料の所在について

福田 千鶴

一九九六年三月二〇日から一九九七年一月一四日までの約一〇ヶ月間、米国ケンブリッジ市ハーバード大学東アジア言語文化学部で「米国における日本関係史料の存在形態に関する調査・研究」というテーマによる調査・研究をおこなった。

本研究の主な目的は、米国における日本関係史料の存在形態として、受け入れの時期、伝来の経過、整理状況、利用状況などを調査し、米国における日本関係史料コレクション形成についての史的展開を検討することにあった。

まず、ハーバード大学燕京図書館に所蔵する和古書類を中心に、日本関係史料の概要調査をおこなった。本史料群のうち江戸期の板本及び写本類約四〇〇〇点は、『ハーバード燕京図書館和書目録』として既に刊行されている。その基本データをもとに、史料群の受け入れ時期、受け入

さらに一九九九年の「史料学論文集」（仮称）刊行に向けての計画および高山町会所文書調査計画が提案された。

れの経過、全体的な特徴、蔵書印等の追跡調査をおこなった。その結果、本史料群の中心となるのは、天台僧正徳勝が明治から昭和にかけて収集したと思われる仏教関係書籍（ペツォールドコレクション）で、一九五一年五月二九日に同図書館に受け入れられた。その中には「日光文庫」、「加州小松西照寺」、「大和山陵村教行寺」など、さまざまな地域の寺院の蔵書印が押下されたものがある。

ペツォールドコレクション以外には、「西荘文庫」（国学者小津桂窓の蔵書）、「立教館図書印」、「白河文庫」（松平定信の創始した藩学文庫）といった有名な文庫から、現段階では出所の特定はできないが、「遠賀文庫」、「堀越文庫」、「烏江文庫」などの蔵書印をもつものがあつた。日本文庫史の観点からの調査も課題となろう。

受け入れ時期が特定できた史料で

古いのは、一八九一年八月二八日受け入れの「富士見十三州輿地全図」である。燕京図書館は、中国・朝鮮・モンゴルなど幅広くアジアの文書記録を収集しており、その一環の中で明治以降に日本から流出した史料が漸次収集されたようである。

ところで、既刊目録では明治期に刊行された板本、あるいは明治以降の近代史料は一切収録されていない。今回の調査目的も近世史料を対象としたため、それらの悉皆調査をする余裕はなかったが、今後はこれらの調査も課題となるであろう。

ハーバード大学の位置するマサチューセッツ州内では、モースコレクションを持つビーボジミュージアム、ポストンファインアートミュージアム、ボストンのアジア部が日本関係史料を所蔵することが知られているが、本調査の対象とする文書記録についてはあまり該当しなかった。ケンダル補鯨ミュージアムは、同館が収集した世界中の捕鯨関係資料の中に占める日本関係史料の割合は低いが、約三〇〇点近い日本捕鯨関係文書を所蔵しており、現在も積極的に収集中とのことであつた。史料閲覧では、畑中久泰氏にお世話になった。

コロンビア大学 C. V. スター東

アジア図書館（ニュー・ヨーク市）は、日本文献担当者の牧野泰子氏から情報を得ることができた。同図書館では、江戸・明治期（一四世紀から一九世紀）の板本コレクションと、ドナルド・キン氏が収集した日本近代文学コレクションがある。同図書館は日本関係史料を積極的に収集するというプロジェクトを計画したことはなく、寄贈により漸次コレクションが形成されたことであつた。それらは現在、貴重書扱いで閉架書庫内に別置されている。検索手段はコンピュータリストが利用でき、総点数は一一六三点となっているが、その内の大部分は稀書複製会叢書（米山堂刊）であり、オリジナルな写本・板本は三五〇点くらいである。特徴的なのは、Motoyama Collection (presented by Hikoichi Motoyama Osaka Japan) ' Gift of Dow Collection (1947-3-29) ' Gift of Hatano Estafa (1971-7-7) である。歴史関係では、図書寮印、昭和三年五月一九日の消印をもつ『將軍徳川家礼典録』（DS822. 25/T652/1861）を所蔵している。

議会図書館（ワシントン）では、元図書館員で現在もボランティアで日本史料を整理されている本田正静

氏から貴重な情報を得ることができた。同図書館のコレクションは、

1、一九〇七年に議会図書館館長に委託された歴史学者朝河貫一の収集文書、

2、一九三〇年から一九四二年の間に坂西志保が東洋部日本課長として在任した間の収集文書

によっておもに構成されている。それらはNDC分類によって整理番号が付されており、文学関係の板本史料については、一九九七年三月に『議会図書館所蔵近代史料 (Pre-meiji works in the Library of Congress)』の目録(四〇三タイトル)が刊行された。同館で古文書扱いにされている日本歴史関係史料は、現在はカードカタログで利用できるのみで、約六〇〇タイトルを所蔵している。同館の特徴は、戦前期に日本関係史料を積極的に収集した点で、米国内における有数の日本史料コレクションといえる。内容的には、検地帳、五人組帳、法制関係史料、中世古記録の写本などがある。明治維新から戦前期にかけての日本国内の文書の伝来のあり方を考える時、朝河と坂西による収集活動を位置づける必要があろう。

平成九年度 新収史料紹介

⑤はマイクロフィルムによる収集を示す。

⑤ 長野県 麻積村葦沢家文書

昨年に引き続き、旧信濃国筑摩郡麻積町村の葦沢家の日記を収集した。

葦沢家日記は、嘉永六年(一八五三)から昭和二十四年(一九四九)までの九二冊が現在するが、今年度収集分の明治三十四年(一九〇一)からは欠年もなく、四十九年分四九冊を収集した。

この日記群は、葦沢家(屋号加賀屋)の私的記録として書き継がれたもので、明治・大正・昭和にわたる一般庶民の生活史や社会史研究に豊富な素材を提供するものである。

なお、日記を含む葦沢家文書は、かつて一括して麻積村誌編集室に寄託され、同村誌編集会からは孔版で「葦沢家〔加賀屋〕文書目録」その一、二、三、四が、昭和五十六年から五十七年にかけて刊行されている。

二年にわたるマイクロ収集にあたり、便宜を図っていたいた麻積村役場ならびに元村誌編集委員長渡辺義晴氏に謝意を表す次第である。

(現蔵者)長野県東筑摩郡麻積村役場、所蔵場所麻積村中央公民館、撮影収録点数一二リール、六三四四コマ)

⑥ 飛騨国大野郡高山町 高山町会所・戸長役場 文書

今年度は史料保存箱の一三五―九箱の途中までの全点を対象とした。

一三五箱は明治七年―二十三年までの土地関係史料であり、一九年「地押取調帳」などがある。一三六箱は地租改正の結果を書き上げた九年「改正地引帳」三冊、その下調べ帳の「改正地引下帳」四冊である。

一三七箱は建物関係であり、明治一年「建物書入売渡奥印留」、明治六年―大正九年「道路橋梁用水路其ノ他營造物調査」などである。前者は字別に所有者が異動することに戸長が奥印をしたものである。

一三八箱は勤業関係であり、明治七年―大正八年「勤業、市場・漆器・一位細工・陶磁器・機業・染色」明治八年―三十八年「飛騨国開産社」などである。

一三九箱は明治一二年、一三年に調査した高山町の営業者の調査であり、菓子商、質屋旅籠屋、料理屋飲食店、陶器、書画骨董、雇人請宿等を各縦帳に記載した。そのほか、明治七年―一九年「史料旅人宿料理飲食店」等がある。

(現蔵者)岐阜県高山市上一之町七五番地、高山市郷土館、撮影点数三六件四二点、一五リール、八四六六コマ)

受贈図書

平成八年度 (五)つづき

(3ページより続く)

西園寺公望伝 別巻一〔岩波書店〕
GHQ指令総集成 1―15

明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧 第

115―120巻

藤村全集 1―17、別巻上、下

正倉院の木工

越中産紙手鑑

国史大辞典 第1―15(下)巻

ものと人間の文化史 41―2、62―81

開拓使日記 1―6

江戸科学古典双書 9―46

広瀬旭莊全集 隨筆、日記 1―9

明治期外国人人名辞典

最新特殊機能インキ

特殊機能色素

防菌防黴剤と快適環境

九州石炭鑛業史資料目録 第12集

佐治重賢氏所蔵小堀政一関係文書

縁切寺東慶寺史料

京都山城寺院神社大事典

1997年度（通算第43回）史料管理学会研修会修了者一覧

〔長研修課程〕

| 名 前 | レポ ー ト 題 目 | 名 前 | レポ ー ト 題 目 |
|--------------------------|---|---------------------------|---|
| 石 川 和 外 (学習院大学大学院) | 記録史料と目録編成—土山家文書を事例に— | 小 高 昭 一 (松江市立博物館) | 武州豊島郡徳丸本村「人別送り控帳」の史料論的考察 |
| 小 澤 昌 一 (学習院大学大学院) | 精田村山口家文書の概要と映像による現状記録について | 皆 川 裕 子 (上尾市教育委員会) | 行政文書の収集・整理・保存について—上尾市教育委員会を事例にして— |
| 関 口 かをり (学習院大学大学院) | 岡本家文書の史料構造分析—出所の検討と再編成— | 白 井 哲 哉 (埼玉県立文書館) | 文書館利用者論序説—利用・普及事業との関連で— |
| 日 暮 義 晃 (学習院大学大学院) | 「御府内沿革図書」の作成過程について | 戸 森 麻衣子 (東京大学大学院) | 東京大学法学部法制史料室所蔵「武州五日市村文書」の成立とその構造について |
| 稲 田 滋 夫 (嵐山町博物館蔵室) | 「広野村区有文書目録」について | 武 田 直 子 (大阪外国語大学附属図書館) | 大学図書館における史料（資料）管理—石浜文庫の事例から— |
| 笠 間 恵美子 (立正大学科目等履修生) | 米沢藩の修史事業と御記録方 | 片 岡 勇 次 (立正佼成会中央学術研究所) | 立正佼成会における文書館設置構想の課題と展望 |
| 小 堀 淳 子 (京都大学数理解析研究所) | 数理解析研究所における灰色文献の保存とその将来について | 坂 下 邦 彦 (川崎市市民ミュージアム) | 史料保存利用機関としての博物館—川崎市市民ミュージアムにおける古文書の閲覧公開試論— |
| 新 井 幸 弘 (群馬県立文書館) | 地域資料の保存体制の確立と文書館の支援—群馬県調査文書の追跡調査を通して— | 西 光 三 (立正大学大学院) | 日本寺檀林関係資料のデータベース化に関する一考察—「中村檀林正東山日本寺書籍群」を中心に— |
| 石 倉 光 男 (神奈川県立公文書館) | 公文書データベースにおける目録データ作成とその検索システム—神奈川県立公文書館の事例— | 石 川 恵美子 (筑波大学附属図書館) | 筑波大学附属図書館における保存の現状と課題 |
| 田 中 悦 子 (国立教育研究所) | 文化財の疎開をめぐる—東京帝室博物館、図書寮、内閣文庫の動きを中心に— | 箱 崎 淳 (大和市教育委員会) | 大和市資料館（仮称）における史料管理学的課題 |

〔短期研修課程〕

| 名 前 | レポ ー ト 題 目 | 名 前 | レポ ー ト 題 目 |
|--------------------------|---|----------------------------|--|
| 加 藤 昌 宏 (秋田県公文書館) | 秋田県公文書館における史料整理と今後の課題—境争論関連史料を題材として— | 岡 田 要 (福井県庁) | 木村孫右衛門家文書の構造 |
| 伊 波 ひとみ (熊本大学附属図書館) | インターネットで情報発信—熊本大学附属図書館のホームページに見るその役割— | 高 木 恭 二 (宇土市教育委員会) | 宇土市における史料管理の現状と課題—市史編さん事業の立場から— |
| 藤 井 典 子 (日本銀行貨幣博物館) | 史料整理過程の記録の意義について—保存庫移転後の整理作業計画策定・実施を中心に— | 中 島 晴 子 (同志社大学学術情報センター) | 同志社大学学術情報センターにおける未整理図書の実状について |
| 藤 本 昌 司 (松山大学図書館) | 松山大学における史料管理の現状と課題 | 小野内 茂 喜 (愛知県豊橋市歴史民俗資料館) | 県史編さん事業と史料保存 |
| 加 藤 克 (北海道大学大学院) | 記録資料と博物館資料の管理・データの電算化における相違と問題点・今後の課題について | 時 里 奉 明 (九州大学大学院) | 県史編纂における史料収集について |
| 小笠原 智 子 (徳島県立文書館) | 徳島県立文書館資料の収集と今後の課題について | 仲 本 和 彦 (沖縄県公文書館) | 文書館における収蔵資料記述方法についての一考察—沖縄県公文書館の事例を踏まえて— |
| 鈴木 満 (秋田県立博物館) | 「酒出文書」考 | 東 昇 (九州大学大学院) | 柳川古文書館の史料収集・整理と普及—青木天満宮文書の整理を通して— |
| 川 田 純 之 (栃木県立文書館) | 明治前期の栃木県庁文書 | 岡 野 光 男 (中央学術研究所) | 立正佼成会教庁における文書・記録に関する保存・利用の一試案 |
| 瀧 川 和 也 (三重県生活文化庁学事課) | 三重県史編さん室所蔵写真史料について—その収集整理と今後の課題— | 安 永 純 子 (愛媛県歴史文化博物館) | 愛媛県歴史文化博物館における文書資料の収集について |
| 筒 井 秀 一 (高知市立自由民権記念館) | 高知市立自由民権記念館情報システムの計画について | 藤 井 隆 史 (信州大学大学院) | 中世における禁制の有効期間—播磨国鶴林寺を事例として— |

彙報

○史料の収集

・マイクロフィルムにより、飛騨国大野郡高山町会所・戸長役場文書、長野県筑摩郡麻績村葦沢家文書、伊豆国田方郡葦山江川家文書を収集した（うち、葦沢家文書は特別研究「近世史料の古文書学的研究」による）。概要は、本号「新収史料紹介」を参照のこと（江川家は次号）。

○史料の所在調査

本年度は、飛騨国大野郡高山町会所・戸長役場文書について実施した。詳細は本号「史料所在調査報告」を参照のこと。

○史料館所蔵史料目録作成のための調査

史料目録第六六集作成のため、愛知県海部郡弥富町域を対象に調査を行った（十一月二十五日～二十七日、大友一雄）。

○史料保存機関事務連絡および調査

高知県立図書館で実施した（十一月二十五から二十七日、吉岡栄美子）。

○運営協議会と評議員会の開催

一九九七年六月二十六日、十一月六日、一九九八年一月三日、二月二四日に運営協議会が、一九九七年七月四日、一九九八年三月三日に評議員会がそれぞれ開催され、教官人事・管理運営・次年度事業計画について評議ないし協議された。

○出版物の刊行

1 『史料館所蔵史料目録』第六六集として「尾張国海西郡森津新田武田家文書目録」（担当大友一雄）を、『同』第六七集として「越後国三島郡深沢村高頭家文書目録」（担当青木睦）をそれぞれ刊行した。

2 『史料館研究紀要』第二九号を刊行した。内容は次の通り。

・近世前期大名相続の実態に関する基礎的研究 福田 千鶴

・近世における「國人領主」と旧臣・「本貫地」―伯氏と山城国上粕村を例として― 吉田ゆり子

・往来手形考 五島 敏芳

・「近世史料論2」―金銭出入覚帳―の性格と内容（二）―武州荏原郡奥沢村

・農家文書の事例― 森 安彦

・農民日記史料論 二―「大黒屋日記（年内諸事日記帳）」にみる地名・人名記事について― 高木俊輔

・市町村役場文書における目録記述の試み―近現代史料整理論ノートⅡ― 鈴江英一

・森安彦教授略歴・主要著作目録
・「国際科研報告」在英日本史料の所在状況 渡辺浩一

・「国際標準記録史料記述（一般原則）」適用の試み―行政文書の場合― 森本祥子

3 『史料館報』第六七号および第六八号（本号）を刊行。なお次号は本年九月刊

行予定。

4 史料叢書2『松代藩庁と記録―松代藩「日記繰出」―』（担当山田哲好、名著出版）を刊行した。

5 『特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」研究レポートNo.2』

6 『幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生・展開・伝存に関する史料学的研究』（平成七～九年度科学研究費補助金基盤研究A報告書）

○一九九七年度史料管理学研修会終了証書の授与

所定の教科目を履修し、レポート審査に合格した受講生に修了証書を授与した。

詳細は本号「一九九七年度史料管理学研修会修了者一覧」を参照のこと。

○館内研究会

「二七〇回」一〇月七日

古文書学的研究「金沢文化財保存修理研究所の活動と保存修復の理念と技術」

「二七一回」一〇月一四・一五日

特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」第四回（二七二回）十一月六日

「尾張国海西郡森津新田武田家文書目録」第六六集の目録編成について

「越後国三島郡深沢村高頭家文書目録」第六七集の目録編成について 青木 睦

〔一七三回〕 一月二日

基盤研究A「幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生・展開・伝存に関する史料学的研究」第三回研究会

〔一七四回〕 二月四日

史料叢書2「松代藩庁と記録」の編成について
山田哲好

史料館の現状と課題
森 安彦

〔一七五回〕 二月一・二日

特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」第五回

〔一七六回〕 二月二五日

国際科研「在欧日本史料の所在と現状に関する調査」第一回研究会

〔一七七回〕 一月二九・三〇日

特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」第六回

〔一七八回〕 二月一九日

基盤研究B「歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究」第三回研究会

〔一七九回〕 二月二六日

近世前期における地域の社会構造―和泉国上神谷を中心として―

内地研究員・東京外国語大学助教授
吉田ゆり子

〔一八〇回〕 三月五・六日

史料管理に関する研究会（修復）

〔一八一回〕 三月一九日

記述標準化の動き及びその適応に関する一考察

史料館COE非常勤研究員 森本祥子

収蔵史料の整理・公開に関する私論
大友一雄

史料整理における電算機利用

史料館リサーチアシスタント（学習院

大学大学院）
五島敏芳

〇共同研究

共同研究「近世の農民・自然・年貢制度の研究」に関する研究会を当館で開催した。共同研究会は、フィリップ・C・ブラウン（史料館外国人研究員、オハイオ州立大学准教授）、青野春水（徳島文理大学文学部教授）、松永靖夫（新潟県小出町史編纂委員長、上越市史編纂委員会近世部会長）、深谷克己（早稲田大学文学部教授）、高澤裕一（金沢大学文学部教授）、渡辺尚志（一橋大学社会学部助教授）、舟橋明宏（千葉県史料研究財団近世部会調査協力員）、及び館員からは森安彦・高木俊輔・安藤正人・山田哲好・渡辺浩一の計十一名で構成した。

第一回研究会が一月二六・二七日に行われた。報告者は次の通り。

割地制度：そこから見たおもしろさ、中からみた複雑さ
フィリップ・C・ブラウン

近世貢租における公平の問題 青野春水

越後南部農村の頼母子講をめぐる

第二回研究会が二月二七日に行われた。

報告者は次の通り。

割地制度に反対した百姓一揆―寛政八年安濃津地割騒動―
深谷克己

明治初期、越後岩手村村方騒動について
舟橋明宏

〇特定研究

「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」に関する研究会を当館で開催した。詳細は本号活動報告を参照。

〇長期在外研修

・安藤正人が一九九七年四月四日―四月四日まで、おもにロンドン大学ユニバシティ・コレッジ（英国）において文部省在外長期研究員として研修を行った。

〇海外出張

国際科研「在欧日本史料の所在と現状に関する調査」に基づいて以下のように出張を行った。

A班（ドイツ）一九九七年六月一日―二九日、森安彦・高木俊輔・青木睦・福田千鶴、B班（オランダ・ベルギー）同年九月一日―二八日・二九日、丑木幸男・大友一雄・渡辺浩一・荒野泰典、C班（オランダ・フランス）同年一〇月一九日―十一月二日、鈴江英一・山田哲好・安藤正人・横山伊徳。なお、B班丑木・渡辺の両名は、九月二四日―二七日はドイツ・ハイデルベルクにおける欧州

日本資料専門家会議に参加。

〇博士（文学）学位の授与

史料館助手渡辺浩一は、学位請求論文「近世都市社会における住民結合と序列意識に関する研究」で東北大学より平成九年一月六日付で博士（文学）の学位を授与された。

〇博士（歴史学）学位の授与

史料館助教授大友一雄は、学位請求論文「日本近世国家の権威と儀礼に関する研究」で国学院大学より、平成一〇年三月四日付で博士（歴史学）の学位を授与された。

〇史料館研究・教育活動一覽（一九九七年度発表のもの。ただし、大学出講は一九九七年度）

森 安彦

・編著『近世の村・家・人（史料叢書1）（国文学研究資料館史料館編、名著出版、三月）

・編著『武蔵国多摩郡後ヶ谷村杉本家文書目録』（史料館所蔵史料目録第六五集、史料館編集・発行、三月）

・共編著『世田谷区史料叢書』第一二巻（世田谷区教育委員会、三月）

・共編著『里正日誌の世界』（東大和市史資料編7、東大和市発行、三月）

・監修・共編著『古文書を読む 解説実践コース・解説ノート』（編集三省堂、日本放送協会発行、一九九七年度版、

四月)

・編集『史料の調査と保存』(木村礎著作集X、名著出版、九月)

・書評「大口勇次郎著『女性のいる近世』」

・『社会経済史学』六二巻五号、一月

・講演記録「近世私文書の世界―文字社会の展開―」(『信濃』四九巻二号、二月)

・論文「金銭出入覚帳」の性格と内容

(一)―武州荏原郡奥沢村原家文書の事例―(『近世史料論2』(『史料館研究紀要』第二八号、三月)

・報告「国文学研究資料館史料館の活動―平成八年度―」(『日本歴史学協会年報』第二二号、三月)

・執筆「地方史事典」(『世田谷代官・大場弥十老』(地方史研究協議会編、弘文堂、四月)

・解説「国立史料館」の現状と課題―史料保存機関の一事例―(『史料の調査と保存』木村礎著作集V、名著出版、九月)

・寄稿「歴史と私」(『月刊歴史手帖』第二五巻一号、名著出版、一月)

・寄稿「史料編さん刊行の二・三の事例」(『史料編さんだより』第三号、埼玉県立文書館、一月)

・講演「史料保存利用機関の現状と課題―国立史料館の事例を中心に―」(『全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関

東部会総会記念講演、国文学研究資料館史料館、五月七日)

・講演「世田谷の歴史―人物からみた世田谷の江戸から維新―」(世田谷区教育委員会生涯学習推進課太子堂分室主催、太子堂区民センター、五月二日)

・講義「里正日誌」から読む村の生活―幕末維新期の村落動向―(NHK学園古文書講座、荏岐・対馬古文書巡見の旅、長崎県立対馬歴史民俗資料館、五月三十一日)

・講義「里正日誌―農兵史料を読む―」(NHK学園古文書講座夏期集中スクーリング、くにたち福祉会館、八月二二日)

・講義「古文書が語る江戸時代の庶民の一生」(埼玉県立文書館・埼玉県立図書館協会主催、平成九年度古文書解説講習会、埼玉県県民活動総合センター、八月二六日)

・講演「古文書が語る江戸時代の庶民の一生」(あきる野市教育委員会主催・NHK学園企画、平成九年度あきる野生涯学習センター・教養セミナー、輝いて生きたる第一回、あきる野ルピアホール、一〇月二一日)

・講演「地域史料保存の重要性」(和歌山県立文書館主催、地域史料保存調査研修会、きのくに志学館、一〇月二二日)

・講義「古文書の収集・整理」(国立公文書館主催、第一〇回公文書館等職員研修会、九段会館、一〇月二一日)

・報告「史料管理学研修の現状と課題」(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会専門職問題委員会、国立史料館、一二月一八日)

高木俊輔

・論文「農民日記史料論―大黒屋日記(年内諸事日記帳)研究序説―」

(『史料館研究紀要』第二八号、三月)

・論文「草莽落合源一郎覚書」(幕末明治民衆運動史研究会「草莽」第三七号、九月一八日、再録)

・共編「松本藩士の日記」(松本市史近世部門調査研究報告書)第4集、松本市、三月)

・講演「農民日記史料の可能性」(駒沢大学大学院史学会、一〇月二五日)

・報告「日記史料について」(特定研究研究会、一月一七日)

・報告「梅村騒動と郡中惣代」(基盤研究A研究会、二月二日)

・報告「大黒屋日記(年内諸事日記帳)にみる島崎家について」(幕末・明治期の国文学研究会、一一月一九日)

・大学出講 立正大学文学部 日本史特講

・研究助成「幕末維新期における農民日記に関する研究」(文部省科学研究費

補助金基盤研究(C)(2))

山田哲好

・講義「松代藩真田家文書の日記の世界―「日記繰出」を読む―」(大学院原典購読セミナー、八月)

・大学出講 千葉大学文学部 文書館学Ⅱ

・大学出講 立正大学 博物館学Ⅲ 博物館実習(記録史料の調査・収集・整理・保存・管理と利用)

福田千鶴

・小論文「お救」政策の転換」(別冊歴史読本37「江戸の危機管理」新人物往来社、一一月)

・書評「中野等『豊臣政権の朝鮮侵略と太閤検地』」(『歴史評論』五六七、七月)

・史料紹介「甲子夜話」(『歴史と地理』五〇八、一二月)

・報告「大名の相続と御家騒動」(幕藩研究会、一〇月二日、東京)

・大学出講 上智大学文学部 前期輪講 鈴江 英一

・論文「地方行政文書の保存・公開をめぐる問題」(『歴史学研究』七〇五号、十一月)

・目録「史料館所蔵史料目録 第六四集 山梨県下市町村役場文書目録(その

一)(『史料館』三月)

・分担執筆「キリスト教の拡張と戦時下の危機」(『新札幌市史』第四巻、通史

四 札幌市、三月

- ・報告「地方行政文書の保存・公開をめぐる問題」(九七年度歴史学研究会大会特別部会一、五月二五日)
- ・講義「文書館における公文書の選別と選別について」(埼玉県立文書館文書史料取扱講習会、二月三日、浦和市)
- ・講演「公文書の保存と利用」(栃木県立文書館市町村文書保存担当者講習会、六月二四日、宇都宮市)

- ・大学出講 慶応義塾大学文学部 日本史特殊講義「近代史料論」、八月
- ・論文「將軍の鷹狩と身分―御鷹の餌鳥御用と餌差―」(『国史学』第一六一号、一九九六年二月)
- ・論文「將軍の鷹狩と江戸の鳥問屋」(『史料館研究紀要』第二八号、一九九七年三月)
- ・小論文「將軍の死をめぐる葬送儀礼」(『古文書通信』三五号、一月二二五五)
- ・共著「里正日誌の世界」(東大和市史料資料編七、東大和市教育委員会、三月)
- ・報告「年中儀礼をめぐる幕藩関係」(幕藩研究会例会報告、一月二二八日)
- ・報告「將軍の鷹狩と身分―餌差をめぐる―」(関東近世史研究会例会報告、三月二九日)
- ・講演「由緒と格式」(千駄ヶ谷社会教育会館、六月二二日)

- ・大学出講 国学院大学文学部 史料論・科研基盤(C)「近世の国家的祭祀儀礼に関する基礎的研究」
- ・渡辺浩一
- ・論文「近世都市における宝蔵と文書管理―播州三木町を事例として―」(『史料館研究紀要』二八号、三月)
- ・論文「仙台城下町における検断・肝入の性格について」(『市史せんだい』七、七月)
- ・論文「近世久保田の都市空間」(秋田姓氏家系研究会編「あきた史記―歴史論考集4」秋田文化出版株式会社、九月)
- ・報告「飛騨高山の文書管理に関する史料を読む」(都市史料を読む会、東京大学文学部、一月一三日)
- ・大学出講 立教大学文学部 史科学Ⅰ 丑木幸男
- ・分担執筆「境町史」(第三巻歴史編下、佐波郡境町、一月一九九日)
- ・報告「島村蚕種業者のヨーロッパ体験」(於高崎経済大学附属産業研究所、一月二九日)
- ・論文「戸長役場史料論」(四)(『史料館研究紀要』二八号、三月)
- ・講義「資料の整理と目録作成」(於日本銀行金融研究所、三月二六日)
- ・論文「真田信利の沼田藩政」(沼田市史しおり、群馬県沼田市市史編さん委員会、三月)

渡辺浩一

- ・論文「近世都市における宝蔵と文書管理―播州三木町を事例として―」(『史料館研究紀要』二八号、三月)
- ・論文「仙台城下町における検断・肝入の性格について」(『市史せんだい』七、七月)
- ・論文「近世久保田の都市空間」(秋田姓氏家系研究会編「あきた史記―歴史論考集4」秋田文化出版株式会社、九月)
- ・報告「飛騨高山の文書管理に関する史料を読む」(都市史料を読む会、東京大学文学部、一月一三日)
- ・大学出講 立教大学文学部 史科学Ⅰ 丑木幸男
- ・分担執筆「境町史」(第三巻歴史編下、佐波郡境町、一月一九九日)
- ・報告「島村蚕種業者のヨーロッパ体験」(於高崎経済大学附属産業研究所、一月二九日)
- ・論文「戸長役場史料論」(四)(『史料館研究紀要』二八号、三月)
- ・講義「資料の整理と目録作成」(於日本銀行金融研究所、三月二六日)
- ・論文「真田信利の沼田藩政」(沼田市史しおり、群馬県沼田市市史編さん委員会、三月)

委員会、三月

- ・編集「黒保根村誌史料所在目録Ⅲ、星野家文書目録(近代)」(群馬県勢多郡黒保根村、三月)
- ・分担執筆「黒保根村誌Ⅰ」(同黒保根村、三月)
- ・分担執筆「黒保根村誌Ⅱ」(同、三月)
- ・論文「近代民間史料の構造―群馬県水沼村星野家文書を事例として―」(『群馬文化』二五〇号、群馬県地域文化研究協議会、四月)
- ・報告「専門職問題と史料館」(日本歴史学協会主催、史料館・史料館員問題シンポジウム)
- ・共著「群馬県の歴史」(山川出版社、五月)
- ・論文「群馬県地方史研究の動向」(『信濃』五六九号、信濃史学会、六月)
- ・編著「上野国寺院明細帳」第六巻、新田郡(群馬県文化事業振興会、六月)
- ・編著「上野国寺院明細帳」第七巻、佐位郡・那波郡・邑楽郡(群馬県文化事業振興会、六月)
- ・報告「近代民間史料の構造と地方名望家」(於地域社会と近代化研究会、六月一五日)
- ・講演「森茂左衛門一揆と村人の生活」(ふるさと文化講座、於群馬県生涯学習センター、七月一九日)
- ・共著「郷土群馬の歴史」(ぎょうせい、九月)

- ・編著「上野国寺院明細帳」第六巻、新田郡(群馬県文化事業振興会、六月)
- ・編著「上野国寺院明細帳」第七巻、佐位郡・那波郡・邑楽郡(群馬県文化事業振興会、六月)
- ・報告「近代民間史料の構造と地方名望家」(於地域社会と近代化研究会、六月一五日)
- ・講演「森茂左衛門一揆と村人の生活」(ふるさと文化講座、於群馬県生涯学習センター、七月一九日)
- ・共著「郷土群馬の歴史」(ぎょうせい、九月)

九月

- ・安藤正人
- ・注釈・監修「本渡市古文書史料集 天領天草大庄屋木山家文書御用触写帳」第二巻(本渡市教育委員会、三月)
- ・研究ノート「記録史料の記述とその標準化―国際的動向―」(国文学研究資料館史料館「特定研究」記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」研究レポート「第一号、三月)
- ・評論「戦争と史料―マレーシアの文書館を訪ねて―」(『記録と史料』第八号、一九九七年一〇月)
- ・報告「ISAD(G)と近世近代地方文書の目録記述―越後国佐藤家文書による試行例―」(記録史料情報管理論研究会、於・群馬県伊香保温泉、二月九日)
- ・大学出講 立教大学文学部(史科学)(一九九七年九月―一九九八年三月)、学習院大学総合講座(記録保存と現代)(一九九七年一〇月―十一月、富山大学人文学部(文書館学)(一九九八年二月一六日―二〇日)
- ・研究助成 文部省長期在外研究員(ロンドン大学ユニバシティ・コレクションほか、一九九七年四月四日―一〇月四日)

- ・研究助成 文部省長期在外研究員(ロンドン大学ユニバシティ・コレクションほか、一九九七年四月四日―一〇月四日)
- ・青木睦
- ・小論文「史料保存の基本」(『栃木県立文書館だより』第二二号、七月)
- ・分担執筆「記録史料の救助―喋吟同時

「機を得て両者相応すること」の難しさ」(阪神・淡路大震災にかかわる史料保存活動の記録)(全史料協近畿部会、一〇月)

・報告「発掘調査記録材料と保存管理―考古学アーカイブズの構築を目指して―」(東京国立文化財研究所・発掘記録の保存・修復研究会、三月二日)
・報告「被災資料の救助事例と記録史料保存利用機関の役割」(国立歴史民俗博物館・博物館施設における歴史資料の防災と被災後の対応研究、三月二日)

・講演「最近の史料保存―二世紀をむかえるにあたり―」(愛知県市町村史担当者連絡会、六月一〇・一一日)
・大学出講 学習院大学「資・史料整理法」(学芸員課程)

・大学出講 学習院大学総合講座「記録保存と現代」(分担講義、一一月)

永村 眞

・編集・共著「南河内町史」通史編(原始・古代・中世)・史料補遺編(栃木県南河内町教育委員会、三月)

・共著「静岡県史」通史編中世(静岡県教育委員会、一一月)

・執筆(科学研究費補助金基盤研究A研究成果報告書)「日本史料テキスト漢字文字列の自動句切処理システムの開発」(研究代表者：永村眞、日本女

子大学、三月)

・論文「中世寺院史料の特質―根来要書」を素材として」(「史艸」三八号、一一月)

・論文「聖教」の相承―守覚法親王草「密要鈔」を素材として」(「醍醐寺文化財研究所紀要」一七号、一二月)

・小論「経蔵と文書函」(「古文書学研究」四六号「研究余瀛」、九月)

・共編「大乗院寺社雑事記紙背文書抄」五(「北の丸―国立公文書館報」一九号、三月)

・座談会「コンピュータの可能性を探る」(「日本歴史」五九五号、一一月)

・大学出向

・成蹊大学文学部「日本仏教史」(通年講義)

・京都橘女子大学「真言密教の成立」(連続講義、六月)

・富山大学人文学部「中世寺院史料論」(集中講義、一〇月)

・報告「寺院史料調査の標準化について」(奈良国立文化財研究所研究集会、三月二九日、奈良)

・報告「顕密聖教論」(日本宗教史懇話会、八月二七日、奈良)

蔵持重裕

・論文「中世普満文書について(二)」(滋賀大学経済学部附属史料館「研究紀要」三〇号、三月)

・論文「海浜の莊園」(藤木久志・荒野泰典編「莊園と村を歩く」校倉書房、六月)

森本祥子

・論文「国際標準記録史料記述(一般原則)適用の試み―諸家文書の場合」(「史料館研究紀要」第二八号)

・報告「ISAD(G)をよむ―記録史料記述の国際標準化をめざすもの」(特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」第三回研究会、三月七日)

史料所在情報検索システム

ホームページ上で公開

史料館が長年にわたり取り組んできた全国に所蔵する史料群ごとの所在情報検索システムを、本年四月から国文学研究資料館のインターネット上のホームページで公開します。

これまで様々なプロジェクトを通じて、入力済の件数は合計で七万件を超えましたが、データのエラーチェックシステムをクリアしたもののから順次公開します。当面の検索項目は、出所名、旧地名、史料の上限と下限年代、主な年代、出典、出典請求記号についてです。

アドレス＝<http://www.nijl.ac.jp>

○人事異動

COE外国人研究員客員教授(一九九七年九月一六日―一九九八年三月一五日)オハイオ州立大学歴史学科准教授
フィリップ・C・ブラウン

平成二〇年度史料管理学研修会(通算四四回)の開催予定

長期研修課程

前期一〇年六月二九日―七月二四日

後期一〇年八月三十一日―九月二五日
短期研修課程

一〇年十一月九日―十一月二〇日

会場 ともに東京会場

国文学研究資料館

(前・後期、短期とも最後の二週間はレポートの作成にあてる)

史料館報 第六八号

平成十年(一九九八)三月三十一日

編集兼 国文学研究資料館

発行者 史料館

〒一四二八五五

東京都品川区豊町一ノ六ノ二〇

電話〇三(三三七八五七)三二〇

FAX〇三(三三八五)四四五六

印刷所 東京都台東区寿三ノ一四ノ五

有限会社 スミダ

電話〇三(三八四二)七三三三